



TITLE:

<図書紹介>S. Takdir Alisjahbana, The Failure of Modern Linguistics in the Face of Linguistic Problems of the Twentieth Century, Kuala Lumpur, University of Malaya, 1965,36p.

AUTHOR(S):

三谷, 恭之

---

CITATION:

三谷, 恭之. <図書紹介>S. Takdir Alisjahbana, The Failure of Modern Linguistics in the Face of Linguistic Problems of the Twentieth Century, Kuala Lumpur, University of Malaya, 1965,36p.. 東南アジア研究 1965, 3(2): 147-147

ISSUE DATE:

1965-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55062>

RIGHT:

(3) Kraisri 氏による, Mrabri 語および近隣のモン・クメル系諸言語の対照語彙表と、かつて Bernatzik が発表した Yumbri の語彙と Mrabri との対照表、(4) C. Velder 氏の, Mrabri camp のはじめての記述、および (5) W. Smalley による前記語彙表の言語学的な注釈ノート、の5篇である。

この調査ではとくに Kraisri の言語調査に重点がおかれたようであり、実際、本書の対照語彙表も、Mrabri 語のみならず他の北タイのモン・クメル諸語（カー諸語、ラワ語、モン語など）がほとんどこれまで未発表のものであるから、Mrabri に限らずこの系統の言語に関心をもつものにはまことに有難い資料である。残念ながら、（本書全体がそうであるが）どちらかといえば一般向きに書かれているため、たとえば、Smalley の注釈にもある通り音表記の方法が余りに粗雑であり、おそらく著者たちの意図以上にはとうてい利用できないであろう。Boeles 氏はいくつかの今後の課題として、Mrabri 語と他のモン・クメル諸語との比較および Mrabri 語の音韻論の研究をあげているが、実際には比較言語的研究に先だってまずその言語の音素体系が明らかにされなければならないのである。

文化にしても、専ら material culture について述べられていて social structure や他の民族との接触の問題は残された課題とされているが、この調査自体が著者のいうように pilot project なのであって、対象が対象だけに有益でもあり読み物としても結構面白い書物となっている。（三谷恭之）

S. Takdir Alisjahbana: *The Failure of Modern Linguistics in the Face of Linguistic Problems of the Twentieth Century*. Kuala Lumpur, University of Malaya, 1965. 36p.

本書は、著者が1964年12月22日にマラヤ大学で行った inaugural lecture であって、当センターから同大学に留学していた前田成文氏からわたくしに読むことをすすめられたものである。

内容は、アジア・アフリカ地域の若々しいエネルギーを感じさせるもので、極端なまでの言語学の現状批判と、この地域の国々が直面している現実の言語問題を解決するための新しい言語学創設の提唱である。

著者は、アメリカの構造言語学にしるヨーロッパの glossematics にしる、現代の言語学は現実社会から遊離した実質的意味の乏しい学問になっていると強く非難している。音韻という言語の外面に専ら関心を集中したり、esoteric なまでの形式主義に陥っている、といい、とくに、言語がそれ自体で安定した記号の体系であって言語学はそれを記述する学問だという根本前提がそもそもの誤りだという。なぜなら、現実の困難な問題は言語の変革にあるのだから、というのである。

A A諸国が現在まじめにとりくんでいる nation building と modernization の問題のひとつとして、各国とも言語の standardization と modernization の問題がある。安定した national language をいかに形成していくか、近代社会にマッチした思考とコミュニケーションのためにいかに言語を合理化するか、次々に入ってくる新しい概念に対する語彙の問題をどう処理するか、こういった language engineering こそが必要なのだ、というのが著者の主張である。本書の後半では、マレー語とインドネシア語について具体的な問題をひとつの例として簡単に説明している。

現代言語学がしばしば形式的・表面的であることはこれまでもむしろ伝統的な言語学者から批判されてきたし、現実の問題解決に対する意欲に欠けることも確かであって、この点は何よりもまず強く反省されてしかるべきであろう。しかし、著者が現代の言語学の範囲を狭くみすぎているということは別としても、この書の提起する問題はあまりに大きすぎる。第一にそれがもはや学問論の問題に関連していること、次にこのような問題解決に果たして構造言語学の考え方自体が本質的に無効なのかどうかということ、また現実の問題といっても著者の立場とは別にわれわれにはまずそれが外国語の問題であるということ、こういった点で著者の主張がすべての言語学者たちを納得させるか、どうであろう。（三谷恭之）

*Hydrologic Data (Thailand): National Energy Authority, Ministry of National Development, Thailand, 1965.*

タイ国の全般に渡っての水文資料の年報であり、その内容は流量記録、浮遊流下土砂量、日降雨量、日蒸発量、風速におよんでいる。